



一郎次、二郎次、三郎次

菊池 寛

(5) 三筋の別れ道

まだ天子様の都が、京都にあつた頃で、今から千年も昔の話です。都から、二十里ばかり北に離れた丹波の國のある村に、三人の兄弟がありました。一番上の兄を一郎次と言ひました。真中を二郎次と言ひ、末の弟を三郎次と言ひました。兄弟と申しましても、十八、十七、十六といふ一つ違ひて脊の高さも同じ位で、顔の様子や物の言ひ振まで、どれが一郎次でどれが二郎次だか、他人には見別けの付かない程よく似てゐました。

不幸なことに、この兄弟は小さい時に、両親に別れたため、少しばかりあつた田や畑も、いつの間にか他人に取られてしまひ、今では誰もかまつてくれるものもなく、他人の仕事などを手傳つて、漸くその日々を暮してをりました。が、貧乏ではありましたが、三人とも大の仲よしでありました。ある夜のことでありました。一郎次は、何かヒドク考へ込んでゐましたが、ふと顔を上げて、「こんなにして、毎日末の見込もなしに、ブラク暮してゐるよりも、いつそのこと都へ行つて見ようかしら。都には、面白いことや賑やかなことが澤山

あるさうだが」と、言ひました。それを聞くと、二郎次も三郎次も聲を揃へて、



「それがいい。それがいい。都へ行けば、きつといゝことがあるに違ひない」と、申しました。

と、一郎次が云ひました。そしてその晩は、みんなて色々出立の用意を致し

ました。あくる日は、秋の空が氣持よく晴れ渡つて、太陽までが三人の出立を祝うてゐるやうでありました。三人は元氣よく、村を出まして、南へくと都の方を指して急ぎました。途中で、一晩宿まりました。村を立て、二日目の朝、大きな峠を登りますと、その峠の頂上から遙か彼方に、朝霧の中に、数限りもない人家が、地面一杯に並んで居るのが微に見えました。「あゝ！都だ」と、三郎次が、大欣びの聲を出しました。それから、兄弟三人は、前よりも一層足を早めて、峠を駆け下りました。が、峠を下りましてから、都までは餘程あると見え、歩いても歩いても、黄い稲田が道の兩側にいくらでも續いてゐました。大きい公孫樹が、道傍に一本立つてゐました。と今まで一筋道であつた道が、その公孫樹の木の所から、三筋に別れて居るのに氣が付きました。兄弟は

一寸困りました。
 「どの道が、一番近いのだらう」と、一郎次が言いました。
 「真中の道が、一番近さうだ」と、二郎次が言ひました。
 「いや、左の道が、一番近さうだ」と、末の弟が言ひました。

すると、一郎次は、何やら考へた後で、
 「私は、一番右の道が近いやうに思ふのだ。が、どの道を行つても、都へ行き着けるのは確かだ。兄弟が一緒に揃つて居ては、奉公口を見つけるにも都合が悪くはなからうか。それよりも、皆別れ〜に、自分の近いと思ふ道を歩いて、銘々の運を試めして見ようか」と、言ひました。
 「それは、よい思付だ」と、二郎次はすぐ賛成しました。三郎次は、兄達に別れるのは一寸悲しうございましたが、根が元氣のよい若者ですから、



ところが、丁度そのとたんでした。道の行手に、砂けむりが立つたかと思ふと、その砂けむりの中から、一頭の白い牡牛が太い鐵のやうな角を左右に振り立てながら、飛ぶやうに走つて來ました。きつと、この牛は何かに驚いて、氣が狂つたのでせう。兩の目は、炎のやうに眞赤で、眼の前にあるものは何でもその角で突きかけやうとするやうな勢です。

「それなら、さうする事にしよう」と言ひました。
 それで、一郎次は、右の道を、二郎次は真中の道を、三郎次は左の道を進むことになりました。別れる時は、二郎次は兄と弟を振り返りながら、
 「たとひ、こゝで別れても、兄弟が、めい〜都で出世すれば、必ずどこかで逢へるに違ない。」と、元氣よく言ひました。

(ろ) 右の道

先づ、初めに右の道を進んだ一郎次のお話を致しませう。
 一郎次は、弟二人と別れて、足を早めて、歩きましたが、その道は大層景色のよい道で、兩側には美しい秋草が咲き亂れてゐました。二里も歩きました時、黄い稲田の向うに、青空に聳えて居る五重の塔が見えました。
 「あゝ、もう都もすぐだぞ」と、一郎次は小躍りして欣びました。

一郎次は、その怖しい勢を見て、體を遠傍へ除けようとしたましたが、牡牛は却つて一郎次の方へ、眞直ぐに突き進んで來て、アツと思ふ間もなく、一郎次を二つの角で、引つかけたかと思ふと、一間あまりも投げ飛ばしたまゝ、また砂けむりを蹴立て、走つて行きました。
 投げ飛ばされた一郎次は、右の腋の下に刀で挽ぐるやうな痛みを感じました。彼は、もう死ぬやうな氣がしました。
 「あゝ、俺は一番損な道來たものだ。右の道來たゝめに、都の入口で死ななければならぬか」と、心の中で思ひました。が、その中に傷の痛みが強くなつていつの間にか、氣が遠くなつてしまひました。
 何時間経つたのか、何日経つたのか、一郎次には分りませんでした。ふと、目を覺すと、自分は立派な御殿の中に、寝てゐました。自分の體の上には生れて一度も見なかったことのない程の美しい絹の蒲團がか

けてありました。枕元には、銀の碗にお薬が入つてをりました。その上に、ふと気が付くと、美しい女の人が、部屋の中に一人坐つてゐました。餘りに容子が變つてゐるので一郎次は驚いて起き上らうとしましたところ、右の腋の下が、また急に痛んで来ました。一郎次が、目を覺したのを見て、その女の人は、

「やつと、お氣が付きましたか、別に御心配なさらななくてもよろしうございます。こゝは、左大臣藤原道世様のお邸でございます。實は、昨日道世様が、鞍馬のお寺へ御参詣の途中、御車を引く牛が、暴れ出して、あなたにそんな大傷を負はせたのでした。道世様は、それを大層氣の毒に思召されて、お寺へ参る途中で人を殺しては、佛様に濟まない、出来るだけ手厚い介抱をして、あの若者を癒してやれと仰せになりましたので、あなたを御殿へ連れて来て、都で第一番のお醫者を呼んで介抱してゐるのです。」と、言ひました。

改めました。



だ二郎次と左の道を進んだ三郎次とはどうなりましたでせう。

檢非違使といふのは、丁度警察署長と裁判所長とを兼ねたやうな、大層勢の強い役えらい役悪者を捕へて裁判するのが仕事でありました。一郎次はこんなに出世しましたが、真中の道を進んだ

一郎次は、夢ではないかと驚きました。左大臣藤原道世と言へば、天子様の第一番の家來で、丹波國の田舎までも、聞えてゐる名高い人でありました。

その女の人は、しばらくすると、かう言ひました。「道世様が、かう仰つしやいました。この若者は、遠い田舎から都へ出て来て、親類もない者に違ひない。傷が癒れば、家來にして使つてやらうと、仰つしやいました。」

それを聞くと、一郎次は、傷の痛みも忘れるほど欣びました。左大臣道世様の家來になることは、田舎の百姓の子である一郎次に取つては、この上もない出世でありました。一郎次の傷は、程なく癒りました。そして、約束の通り、左大臣の家來になりました。

正直で、利口な一郎次の事ですから、グン／＼出世しまして、十年経つか経たないうちに、檢非違使といふ役になりました。そして名も左衛門尉清經と

(は) 真中の道

真中の道を進んだ二郎次は、兄と弟とに別れてからは、馳け出さんばかりに、足を早めて急ぎました、が、真中の道が一番近いと思つたのは、とんだ思違ひであつたと見え、二里歩いても三里歩いて道の兩側には竹藪ばかりが續いてゐて、淋しい田舎道がどこまで来て絶えませぬ。その中に、暮れ易い秋の日は、いつの間にか、トツブリと暮れて、人通りのない街道は、大層淋しうございました。三人兄弟の中では、一番氣の強い二郎次も、とんと當惑してしまひました。「この様子では今宵のうちには、トチも都に着けさうにはない。どこかで一晚宿るところにしよう。」と思ひました。そのうちに道傍に地藏様のお堂がありましたからその縁外に上つて、そこで一夜を明すことにしました。ところが真夜中頃でした。寐入つてゐる二郎次の肩を揺すぶつて、「おい／＼と、揺り起す人がありました。(つゞく)」



(は) 真中の道(つゞき)

ところが、真夜中頃でした。寐入つてゐる二郎次
の肩を揺すぶつて、

「おい〜」と、揺り起す人がありました。二郎次
は、気がついて起きて見ると、見知らない人が自分
の肩に手をかけてゐました。折柄、空高くさし昇つ
てゐるお月様の光でその男を見ますと、それは武士
らしい如何にも強さうな男でした。その男は、二郎
次が目を覺したのを見ると、

お館へ行くことになりました。武士は不思議なこと
に、都の方へは行かずに、道から左に折れて、小川
に添うた細い道を、ドン〜進んで行くのでした。
二郎次は、一寸不思議に思つて、

「そのお殿様といふのは、都にお住ひではないのか」
と聞きました。すると、武士は何氣ない顔をして、
「都にもお館はあるが、今は、みぞろヶ池の傍に住
んでゐられるのぢや。お前が、都見物に行きたいの
なら、明日にも連れて行かうぞ」と言ひました。

そのうちに、道の行く手に、月の光に照されて鏡
のやうに光る大きな池が見えましたが、その池の水
際には、蘆やよしが澤山生え茂つてゐる上に、池の
周囲には大木が生ひ茂つて、大蛇でも住みさうな氣
味の悪い大池でありました。二郎次は、こんな淋し
いところに殿様のお館があるのかと不思議に思つて
ゐますと、武士は、

「私に離れぬやうにせよ」と言ひながら、大木の森
の中の細い道を歩いて行くのです。と、二三丁も來

一郎次、二郎次、三郎次

菊池 寛

「おい、お前は一體どこの者だ。なぜこんな所で寝
てゐるのか」と聞きました。二郎次は、おづ〜し
ながら、丹波の國から都へ行く譯を話しました。す
ると、その武士は親切らしい笑顔をして、

「それはよい都合ぢや。わしの仕へてゐる殿様は、
お前のやうな若者なら幾人でもお召し抱へになるの
ぢや。わしの殿様に奉する氣はないか」と言ひま
した。それを聞くと、二郎次は小躍して所びきして、
早速奉公したいと申しました。

やがて、二郎次は武士に連れられて、その殿様の

た頃です、急に今までの森がなくなつたかと思ふと、
池に添うて廣い平地があつて、その平地の真中に、
それは〜立派な御殿がありました。二郎次には生
れて初めて見るほどの美しい大きな御殿でありまし
た。先に立つてゆく武士は、

「さあ、お前も遠慮なく這入るがよい」と言ひなが
ら、その御殿の中へつか〜這入つて行きました。

玄關から幾間も〜通つたと思ふ頃、一つの大廣
間に來ました。その大廣間は、銀の皿に、灯が幾十
となく輝いて晝のやうに明るうございました。見る
と、その廣間の中には、どれもこれも強さうな男が
三十人ばかりお酒宴をしてゐました。そして一番高
い所に、身の丈が六尺もある位な大男が、胡座をか
いて坐つてをりました。それは〜強さうな、獅子
でも虎でも一掴みにしさうな男でした。二郎次を連
れて來た武士は、その大男の前へ二郎次を連れて行
つて、

「この若者が奉公をしたいと申しますから、引き連

れて参りました」と申しますと、その大男は、「よし／＼」と破鐘のやうな聲を出して背きました。それから、二郎次も皆と一緒に酒を飲んだり、物を食べたりしました。それは生れて初めて食べるやうな御馳走を、腹一杯食べました。二郎次は心のうちで、

「その日のうちに奉公口が定まつて、その上にこんな御馳走が食べられるとは、こんなうまい話はない己が進んで来た真中の道は一番幸な道だつたな」と思ひました。

その翌晩でした。昨日二郎次を案内して来た武士が来まして、

「今晚は、お殿様が都へおいでになるのぢや。お前もお伴をさせてやる」と言ひました。暫くすると、いよいよ出發といふことになりました。お殿様といふ六尺に近い大男は、立派な白い馬にひらりと乗りました。その後から、上の方の家来が六七人ばかり馬に乗つて續きました。残つた者は、めい／＼お殿

様の馬を圍んで行列を作つて歩きました。不思議なことに、どの男も／＼、弓や長刀やを持つてゐました。二郎次にも、「お前にはこれを貸してやる」と一本の太刀を貸してくれました。

二郎次は、こんなに夜遅くお殿様はどこへ行くのだらうかと疑ひながらも、黙つて付いて行きました。やがて、大きな川にかゝつてゐる橋を渡ると、そこはもう都の中だと思ひ、立派な家が澤山並んでゐました。その中に、皆は中でも一番立派な家の前に止りました。そして何か相談を始めました。二郎次はお殿様の都のお館といふのは、この家のことかしらんと思つてゐますと、五六人の男がバラ／＼と仲間から離れたかと思ふと、この立派な家の塀をスル／＼と登りました。オヤ／＼と驚いてゐますと、塀を登つて這入つた男が内から門をギイツと明けますと、仲間の者は皆、長刀や太刀を抜き放つて、ドヤ／＼と門の中へ押し入りました。二郎次は餘りの怖しさにブル／＼顫へてゐますと、昨日二郎次を案

内した武士が二郎次の傍へ来ました。

「何と驚いたらう。己がお殿様と言つたのは、この頃でも名の高い鬼童丸といふ大盗坊ぢや。お前は一たん奉公すると言つたからには、逃げる譯には行かないぞ。さあ、己と一緒にこゝで見張り番をするのぢや」と言ひました。

二郎次はこれを知ると腰を脱かすばかりに驚きました。鬼童丸といふのは、その頃日本中で、唯知らぬ者もない大盗坊でありました。二郎次は、知らぬ間に、盗坊の手下になつてゐたことを心から悲しみ

ました。すぐ逃げようと思ひましたが、案内をした男は、手に弓を持つてゐて、二郎次が逃げ出せば、



一矢で射殺さうといふ様子が見えました。そのうちに、家の中では人の叫ぶ聲や、斬り合ひをする音がしたかと思ひますと、盗坊共はめい／＼金銀の這入つた袋を重さうに擔いで出て参りました。

皆はその家の前で勢揃ひをすると、素来た道を歸りました。二郎次も、逃げようと思へば直にも殺されさうなので、恐る／＼後から付いて歸りました。

やがて、みぞろヶ池の御殿へ歸つて来ますと、鬼童丸は手下を大廣間へ集めて盗んで来た金銀を山のやうに積んで、それを一掴みづゝ手下にやりました。二郎次が片隅にブル／＼と顫へてゐますと、鬼童丸は破鐘のやうな聲で、「さう、小僧、遠慮をせいでよいぞ。お前にも一

「掴みやるぞ」と言ひました。貰はなければ掴み殺されさうなので、二郎次はビク／＼しながら、受け取りました。

が、受け取つて見ると、それは金や銀のお金で、二郎次などが夢にも見たことのない大金でありました。根が三人兄弟の中では慾の一番深い二郎次でしたから、そんな大金を見ると、フラ／＼と悪い心が起りました。お金がこんなに儲かるのなら、盗坊の仲間になつてもいいと思ひました。そしてとう／＼心から鬼童丸の手下になりました。元來利口で勇氣のある男でしたから、盗坊の仲間では、だん／＼出世をしまして、鬼童丸が源頼光様に殺された後には、自分が仲間の大将になつて、名を改めて、みどろヶ池の多能丸と言つて、都近くの家を荒してをりました。

右の道を進んだ一郎次と、真中の道を進んだ二郎次のことはこれで分りました。さて左の道を進んだ三郎次はどうなりましたか。

「それでは、お氣の毒であります。私の主人の家まで一寸お出で下さい。決して悪いことはありませんから」と申しました。

三郎次は欣びました。誰一人知邊のない都の中へ、こんな親切な人に逢ふのは、地獄で佛に逢ふやうなものだと思ひました。

女の人は三郎次を連れて半町ばかりも歩いたかと思ふと、立派な家の中に這入りました。三郎次も後から續いて這入りました。その家は、周囲が六七町もある廣い邸で、邸の中には大きなお蔵が十五六もずらりと建ち並んでをりました。

女の人は、三郎次を連れて、長い廊下を通つたか



(に) 左の道

左の道を進んだ三郎次は、兄弟の中では一番年も若く、氣も優しかつたので、二人の兄と別れて、淋しくて泣き出しさうになりました。が、これではならぬと思ひ返して、元氣よく進んで行きました。この道は、廣い川に添うてをりました。が、都まではよほど遠いと思ひ、日の暮れかゝる頃に、漸く都の町はづれに着きました。もう足が草臥れて、一足も歩けない程に疲れてゐました。どこかに宿屋はないかと、キョロ／＼見廻しながらやつて來ますと、

「もし／＼」

と三郎次を呼びとめる女の人がありました。

「はい／＼、私をお呼びになりましたか」と立ち止りますと、女の人は三郎次の顔を見ながら、

「あなたは旅のお人でありませうか」と聞きました。

「はい、私は丹波の國から都へ參るものであります」と言ひました。すると、女の人は欣んで、

と思ふと、奥の一間へ三郎次を案内しました。見ると、その部屋は、目も眩むやうな美しい部屋で、床の間には金や銀の道具が澤山置いてありました。三郎次があまりの美しさにボンヤリ立つてをりますと、女の人は、

「あすここに寝ておられるのが御主人様であります。」

と言ひました。

如何にもその美しい部屋の真中に、一人の年寄の病人が、苦しい息をしながら、床の上に寝てゐました。

三郎次は、おづ／＼そこへ坐りました。すると病人は女の人に、

「それでは、娘を呼んで來い。」

と言ひました。

女の人は、

「はい」と答へて、靜かに立つて行きました。



一郎次、二郎次、三郎次

菊池寛

(に) 左の道(つゞき)

三郎次が「おづ／＼と年寄の側に坐つて待つてをりますと、そこへ間もなく十五六の美しい女の子が這入つて來ました。年寄は三郎次に向つて、「お前さんは旅の方ですか」と、苦しうに尋ねました。

「ハイ、左様でございます」と三郎次は優しく答へました。すると、年寄は寢床の上で半分體を起しかけながら、

これを聞いた時の三郎次の驚きと欣びとはどんなであつたでせう。が、よく考へると、自分のやうな乞食同様な百姓を、こんな長者の内の婿にする筈はない、これはきつとこの年寄の氣が狂つてゐるのか、それだなければ笑談に言つてゐるのだと思ひましたから、正直な三郎次は少しムツとして、「子供だと思つて私をなぶるのはよして下さい。私は百姓の婿で、こんな長者の内の婿になるやうな者にはありません」と言ひました。すると、その病人は悲しうな顔をして、

「譯を話さなかつたのは私が悪かつた。譯を話さなければ合點の行かぬのも尤ぢや。私の耻を話すことにしませう」と、病人は苦しうにコン／＼咳をしながら話しつゞけました。

「一體、私は一代のうちに、十萬貫(昔の金の名です)といふ身代を作つたもので、都でも賀茂の長者と言へば、誰知らぬ者もありません。が、私がお金を蓄めたのは、正直な正しい遣り方ではなかつた

「私はあなたにお願があるのぢや。なんと聞いてはくれまいか。今にも死にさうなこの病人の一生の願をどうか聞き届けてはくれまいか」と、手を合はさんばかりに言ひました。三郎次は、苦しうな病人の様子を見ると、氣の毒になりましたので、

「私の出来ることなら、何でも聞いてあげる」と言ひました。すると、病人はホツと安心したやうに、「お願といふのは別のことではないのだ。この娘をお前さんのお嫁にして、この内を繼いではくれまいか」と言ひました。

のです。私はお金を蓄めるに、いろ／＼悪いことを致しました。貧乏人にお金を貸して、高い／＼利子を取つたり、百姓から重い年貢を取つたり、時々は賈の證文を書いて、他人の家や、田畑を騙して取つたりしたこともありませう。その上、出すこと、言つたら、一文も出しません。どんなに困つてゐるものがあつても、米一合、お金一文も恵んだこともありませう。そのお蔭で、お金は面白いやうにドン／＼溜りました。

その代り世間の人からは、全く、鬼か蛇のやうに憎まれて來ました。私はついこの頃まで、お金さへあれば、どんなに憎まれてもかまふものかと思つてゐました。ところが、今年の春、私の妻が死にました。その上、秋の初から、私も重い病氣になりました。私には、子供と言つてはこの娘たつた一人なのです。私は私がこの病氣で死んだら、娘が一人ぼつちになつて、さぞ困るだらうと思ひましたので、私の生きてゐるうちに、是非よい婿を取つてやらうと

思つて、都の内を探しにかゝりました。

「すると、どうでせう。年頃の若者のある内では、どの内でも、幾らお金があつても、加茂の長者の家へは婿にはやれない。鬼の内へ婿にはやれないと、誰一人婿に来ようといふ人はないのです。私は、お金があれば何でも出ると思つてゐましたが、それは、私の大きな誤でした。私は、たつた一人の娘に婿を取つてやることさへ出来ないのでした。娘はそれを知ると、毎日泣きました。私も娘が可愛相で泣きました。十萬貫といふ大金も、今では何の役にも立たないのです。その内、私の病が重つてもう今日死ぬか明日死ぬか分らない命なのです。私が死んだら、娘はたつた一人世の中に取り残されて、憎まれ者の子として、世間からどんなにいぢめられるだらうかと思ひますと私は死ぬにも死なれないのです。「私は、とう／＼かう考へました。都の人はみんな加茂の長者を憎んでゐるから、とても婿に来手はあるまいが、旅の人なら私を憎む譯はないのだから、

して、三郎次の方を拜むやうに見えましたが、それで安心して氣が緩んだと見え、その徳息が絶えました。



分の五萬貫を、都中の貧乏人に分けてやりました。すると、世間は正直なもので、都の人々は寄ると觸

た。

三郎次は悉しみに暮れてゐる娘を慰めて、お葬ひを出した後で、その娘をお嫁にしました。

で、二代目の加茂の長者になりました。そして、身代の十萬貫の半

来てくれるかも知れないと、思ひましたから、私は召使ひの者を街道へ出して、旅の方に來ていたゞくことにしたのです。運よく、あなたのやうな立派な方に來ていたゞくことが出來て、こんな嬉しいことはありません。親子二人を助けると思つて、どうか私のお願いを聞いて下さいませんか。」と言ふかと思ふと、病人はさ／＼疲れたやうに、グッタリと俯伏してしまひました。三郎次は、初めて年寄の願の訣が分りました。が、どんなにお金があつても、都中の人から鬼のやうに憎まれて居る内の婿になつては、どんなひどい目に逢ふかも知れぬと思ひましたので、一度は斷らうと思ひました。

が、よく見ると、病人も可愛相な娘も、シク／＼泣いてゐて、もし三郎次が斷つたら、病人は悲しみの餘り、その徳息が絶えはせぬかと思はれましたから、根が氣の優しい三郎次は、「そんなに、お頼みなら、いかにもこの内の婿になりませう」と申しました。すると、病人は手を合は

ると、「前の加茂の長者は、鬼であつたが、今度の長者は佛様ぢや。佛の長者ぢや。佛長者ぢや」と、噂しました。

かうして、三郎次は夫婦仲よく、貧乏人を恵んで、幸福に暮しました。花子と云ふ可愛い、女の子が生まれて、何時の間にか十年ばかり経ちました。

さて、一郎次と二郎次と三郎次のめい／＼の話はこれで済みましたが、一體三人は何處で出會ふてせうか。

(ほ) 三人兄弟の會つた所

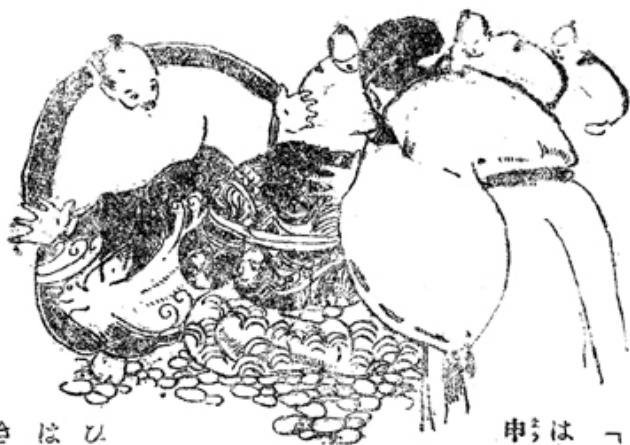
三人の兄弟が、都へ出る途中で、三筋の道に別れてから、十年も経ちました頃のことです。その頃検非違使(今の警察署長と裁判所長とを兼ねて居る役であることは前に云ひました)と云ふエライ役を勤めて居る一郎次の左衛門尉清經の下へ、その頃都で名高い加茂の長者から訴がありました。それは、

その前の晩、加茂の長者の家へ三十人ばかりの盗賊の一隊が押し入つて金を澤山盗んで行つたばかりでなく、娘の花子を攫つて行つたと云ふのです。左衛門尉清経は、前から盗賊のあはれ廻ることを怒つて居りましたが、こんなな都の中へも遣入つて来るやうでは、もう一刻も、その儘には、捨て、置けないと思ひました。そして、家來の者を二百人ばかり集めまして、

「噂にきくと、加茂川の水の上のみぞろが池には、鬼女が住むと云ふ噂があつて、人の近よらないのをよゝいことにして、多能丸と云ふ大泥棒が立派な邸を作つて住んで居ると云ふことぢや。加茂の長者の家に押入つた盗賊も、此の多能丸に逢ひない、早速かけ向うて、必ず生け取りにして来い」と、申し付けました。

その翌日のことでした。みぞろが池に行つた家來の一人が走つて歸りました。「殿様、およろこびなさい。多能丸を見事に生捕り

い弟の三郎次ではありませんか。一郎次の左衛門尉は、思はず大きな聲を出して、



「あう三郎次ではないか」と、申しますと、三郎次も、檢非違使の役所だと云ふことも忘れて、

「あう、兄さんですか」と、云ひました。二人は、兩方から抱き付くやうにし

ました。長者の娘の花子も、無事に取り返しましたと申しました。

左衛門尉は大欣びで、別の家來に、「直ぐ加茂の長者の内へ行つて、花子を受け取りに来いと云へ」と、申しました。

やがて、檢非違使の御役所へ、高手小手に縛られた多能丸が、連れて来られました。そして、庭の白い砂の上に、坐らされました。丁度、其處へ加茂の長者が娘を受取りに自分でやつて来ました。これは縁側の上に乗つて居りました。間もなく「シイッシイッ」と、聲がしたかと思ふと、烏帽子をつけて立派な服を着た左衛門尉が、しづ／＼と現れました。左衛門尉は、一番高い上座に坐ると、加茂の長者の方を見て、

「お前が、加茂の長者か」と、云ひました。今まで俯いて居た長者が、顔を上げて、

「ハイ左様でございます」と、云ひました。その顔を一郎次の左衛門尉がよく見ますと、それは紛れもな

でした。

砂の上に坐つて居る、盗賊の多能丸も、やつぱり、縛られた身を悶えながら、齒を喰ひしはつて泣いて居ました。大粒の涙がポロ／＼と、砂の上に落ちました。

多能丸の泣いて居るのに、ふと気が付いた一郎次と三郎次とは、これは又どうしたわけかと思ひ議に思つて、この盗賊の顔を見ました。それは、一郎次には弟、三郎次には兄に當る二郎次に違ひありませんでした。

三人兄弟の、そのときの驚き欣び悲しみは、どんなでしたらう。それは、皆さん自分で考へて見て下さい。

三人の兄弟が、三筋の道に別れた時は、たつた一足の違てありました。それがあしまひには、こんなひどい違になりました。

(おはり)